

# 大雨よふるな!

(岩浦用  
水物語)

たつの市龍野町

農民たちは、日々にみんなそう言つてい  
た。  
この「岩浦井堰」のできるまでの長い間、「岩見井」と「浦上井」を利用する農民は、せき止めでは切られ、切られてはせき止めと、大変な水とのたたかいであつた。

「ばんざーい!」「ばんざーい!」

農民たちのよろこびの声が、けいろう山にこだましていた。

一九五三(昭28)年三月、五年がかりで進

井堰ができあがつたのだ。

「もうこれで、大雨をおそれなくていいんだ。」

だ。」

それが今ようやく、一億九百七十三万円(当時)をかけて、揖保太子一帯の村々の人たちの苦しみがすくわれたのである。

井せぎは、農家にとつて一年中でもっとも大切な仕事で、この作業に出ることを、「大井人足」、または、「あらゆ人足」などと言つていた。

午前三時、まだまつ暗な中を、あちらの

村からもこちらの村からも、男の人たちが揖保川の土手を上流にむけて歩いて行く。

農民たちは、もつてきた俵の口を開き、「じょうれん」で川原の小石や砂をすくって入れはじめた。

いっぱいになつた口をしめるのは老人。子どもたちも、ひつしに石をひらつて入れる。

、およそ二時間あまりのち、川原には、二〇〇〇ほどの石だわらがつみあげられた。

川西と川東の両方の土手から少しずつ石だわらをならべていく。川どこには、「底榨」という土台がありその上にならべる。一俵は五六十キログラムもある。その重いたわら

を何度も足場の悪い川原の上を運ぶのだからたまらない。

午前十時ごろになると、その日の作業を終える。

次の村にバトンタrottだ。

三日もたつと、川はしだいにせばめられ中央からだけ流れなるようになる。

ここを止めれば、水があがる。

しかし、あまりにも流れがきついので、一俵や二俵投げこんでもどうにもならない。

そこで、何俵も石だわらをつんだ船をやや上流からその中央めがけて進めていく。

船が近づく。ワクの上へ、船にのつた男たちがいつせいに石だわらを次々と落とす。

「もう少しだ！」

船をひっぱる男たちの手にいつそう力が入る。

「水が、水が上がらんと田植えができないぞ！」

水があがりはじめる、田植えは用水路の上流の村からはじめられる。だから、下の田まで水が来るにはかなりの日数がかかる。岩見井の水を利用して、太子町や、姫路の網干などの村々はことさら大変であった。

揖保川から引いてきた水を、夏になるとほとんどなくなってしまう林田川に一度落とす。そして林田川に井堰をつくってもう一度水を上げ、田に送つていた。

だから、年に二度川せぎをした。揖保川で三・四百人、林田川で百人、あわせての五百人の人足を毎年必要としたのだから、大変な苦労だった。

七月はじめ、田植えはやつと終わった。

毎年きまって、田植えが終わると雨がふりはじめる。

これが農民にとつて一番の心配ごとだつた。——雨は夜になつて、だんだんとはげしくなつていつた——。

まつ黒な水が上流から、井堰の上をのりこえのりこえ流れしていく。まるでかえるにおそいかかるへびのように。

「門<sup>もん</sup>」へとつづく取水路<sup>しゅすいろ</sup>にもようしやなく  
どろ水<sup>みず</sup>がおしよせている。

よく朝<sup>あさ</sup>、やつと雨<sup>あめ</sup>があがつた時<sup>とき</sup>、農民<sup>のうみん</sup>たち  
は荒れた「井堰<sup>いせき</sup>」を見てガツクリとひざまづ  
いてしまった。

つい先日<sup>せんじつ</sup>、あせ水<sup>みず</sup>たらしてつみ上げた石<sup>いし</sup>だ

わらが、川岸<sup>かわぎし</sup>の部分<sup>ぶぶん</sup>をのこしてあとかたもな  
くおし流<sup>なが</sup>されてしまつているではないか。

取水路<sup>しゅすいろ</sup>も、すっかり土砂<sup>どしゃ</sup>でうまつてしまつ  
ている。

年<sup>とし</sup>よりの百<sup>ひゃく</sup>しうが突然<sup>とつぜん</sup>言つた。

「早く、早く水<sup>みず</sup>を上げないと稻<sup>いね</sup>がかれてしま  
う！」

田植<sup>たう</sup>えを終<sup>お</sup>えたばかりの稻<sup>いね</sup>は、今一番<sup>いちばん</sup>水<sup>みず</sup>が

大切<sup>たいせつ</sup>だ。このまま一週間<sup>いっしゅうかん</sup>も水<sup>みず</sup>はいらなければ  
大変<sup>たいへん</sup>なことになつてしまふ。

夜<sup>よる</sup>の明けない間<sup>あいだ</sup>から、たわらをかついで、  
井せぎに向<sup>むか</sup>う人々<sup>ひとびと</sup>の姿<sup>すがた</sup>がつづく。「一日<sup>ついたち</sup>  
も早く流<sup>なが</sup>された井<sup>いの</sup>を元<sup>もと</sup>にもどさねば……」

と。

大水<sup>おおみず</sup>によつて井堰<sup>いせき</sup>がくずされるのは、毎年<sup>まいとし</sup>

二<sup>二</sup>三回<sup>かい</sup>はあつたと言<sup>い</sup>う。その度に農民<sup>のうみん</sup>たち  
は、それぞれたわらをもちより、石<sup>いし</sup>だわらを  
つくつてつみ、うもれた取水路<sup>しゅすいろ</sup>の土砂<sup>どしゃ</sup>をとり  
のぞく作業<sup>さぎょう</sup>に出た。

今も昔<sup>いま</sup>も、水<sup>みず</sup>は米<sup>こめ</sup>づくりに最も大切なもの  
である。それだけに、毎年・毎年<sup>まいとし</sup>がまさに水<sup>みず</sup>  
とのたたかい、揖保川<sup>いぼがわ</sup>の大水<sup>おおみず</sup>とのたたかいだ

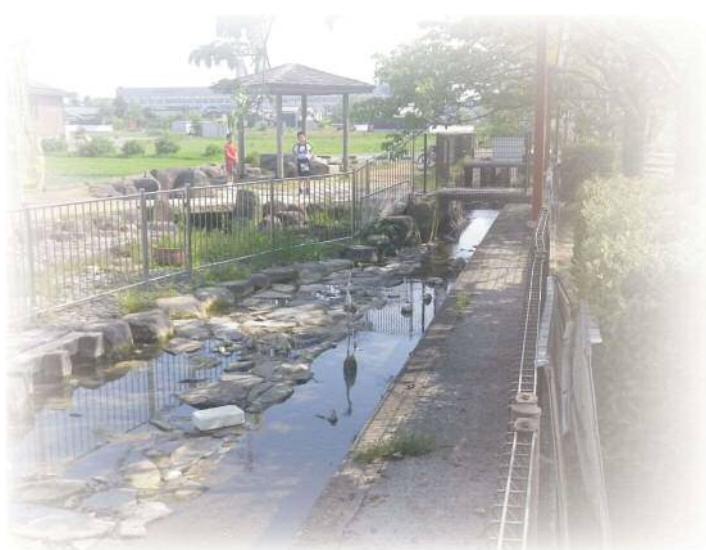
つたのである。

「大雨よふるな、とり入れの終わるまでは、  
二度と…。」

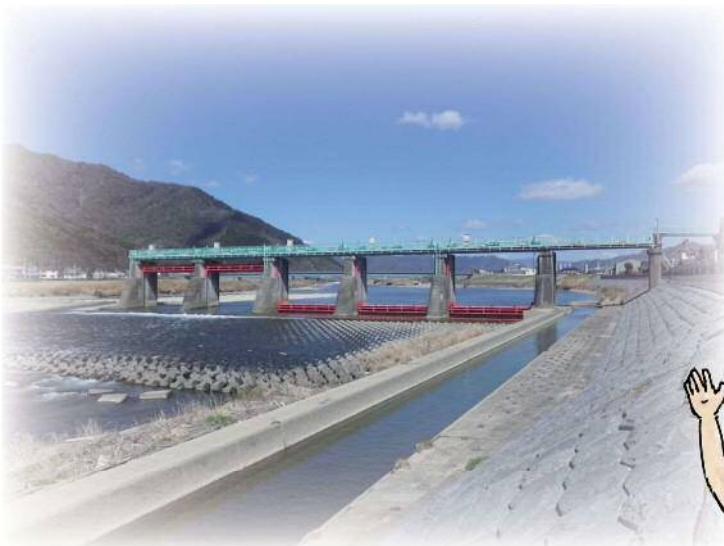
それは、心からのねがいなのだ。



分水施設(揖保郡太子町宮本)



宮本公園(揖保郡太子町宮本)



岩浦頭首工(たつの市龍野町日飼)

